

# 博 士 学 位 論 文

— 論文要旨および審査結果の要旨 —

第 8 号

武蔵野音楽大学

## — は し が き —

本編は学位規則(平成25年文部科学省令第5号)第8条による公表を目的として、平成26年度本学において博士(音楽)および博士(音楽学)の学位を授与した者の論文の要旨および論文審査の結果の要旨を収録したものである。

# 目 次

| 学位記番号    | 学位の種類    | 氏 名     | 論文題目  | 頁 |
|----------|----------|---------|---|---|
| 博甲第 15 号 | 博士 (音楽学) | 中 村 良   | ルイ 14 世治世下の王立音楽アカデミー (1671-1715) で上演された劇場作品における舞曲<br>— 印刷資料に基づく統計的観点による考察 — | 1 |
| 博甲第 16 号 | 博士 (音楽)  | 鈴 木 雅 之 | スズキ・メソードにおける指導者の指導観   | 4 |

|         |   |
|---------|---|
| 氏 名     | 鈴木 雅之 <sup>すずき まさゆき</sup>   |
| 学位の種類   | 博士 (音楽)   |
| 学位記番号   | 博甲第 16 号  |
| 学位授与日   | 平成 27 年 5 月 16 日  |
| 学位授与の条件 | 学位規則第 4 条の 1  |
| 学位論文題目  | スズキ・メソードにおける指導者の指導観   |
| 論文審査委員  | 主査 教授 加藤 徹也<br>副査 教授 寺本 まり子<br>副査 准教授 森田 恭子<br>副査 講師 丸山 忠璋<br>副査 中山 裕一郎<br>(信州大学特任教授) |

## 論 文 要 旨

本研究は、音楽教育「スズキ・メソード」Suzuki Method の指導者を対象に、その指導観と指導者の学習過程を明らかにしようとするものである。

本研究の目的は、①スズキ・メソード指導者を対象とした面接調査から、スズキ・メソードの指導観を明らかにすること、②スズキ・メソードの指導者は、どのように指導力を形成していくのかについて、面接空調査から、指導経験の積み重ねによる学習過程の統合モデルを構築すること。以上の 2 点である。

本研究は 6 つの章から構成され、各章の要約は次の通りである。

序章では、スズキ・メソードについての現状と動向、先行研究の概観、問題の所在と本研究の意義、本研究の目的、本論文の構成、研究における用語の定義について述べた。

第 1 章では、文献から、研究の背景となるスズキ・メソードと教師の力量形成についての基礎理論を探究した。

第 2 章では、研究方法について述べた。本研究では、スズキ・メソード指導者に対する、半構造化面接を行った。分析には、木下 (2011) の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach : 以下、M-GTA) を用いた。

初めに調査方法の妥当性を確認するための予備調査を行った。予備調査を扱った第 1 節では、予備調査の目的、方法、結果と考察、明らかになった課題について述べた。予備調査における研究協力者は、20 歳代から 30 歳代で、指導歴が 1 年と 4 年の 2 名であった。予備調査の結果、調査方法に大きな問題はないと判断した。また、質問項目に 2 項目を加えることにした。

本章第2節では、本調査における目的と方法について述べた。本調査の研究協力者は、スズキ・メソード若手指導者群5名(1998年1月以降に指導者の認定を受けた20歳代または30歳代の指導者群)とベテラン指導者群10名(1998年1月以前に指導者の認定を受けた指導者群)であった。

第3章では、本調査における結果を示したうえで、若手指導者群とベテラン指導者群両群の考察を行った。

第1節 研究1(若手指導者群)では、スズキ・メソードの若手指導者を対象とした概念の生成、関連図の作成、若手指導者の指導観に関する考察を行った。

第2節 研究2(ベテラン指導者群)では、スズキ・メソードのベテラン指導者を対象とした概念の生成、関連図の作成、若手指導者の指導観に関する考察を行った。

第4章では、総括的考察を行った。

第1節 若手指導者とベテラン指導者の比較においては、次の9項目について、若手指導者とベテラン指導者の比較・検討をした。

1. ライフストーリー 2. 教育哲学 3. 指導目標 4. 指導における信念
5. 指導実践 6. 対象者自身の問題点と課題 7. 問題の克服
8. 組織の問題点と課題 9. スズキの指導者間における問題点と課題

第2節ではスズキ・メソード指導者の指導観と学習過程に関する総括的考察を述べた。

終章では、各章の概要と、結論を示したうえで、スズキ・メソードの今後に対する提言と、本研究の限界と今後の課題について述べた。

本研究における調査から、スズキ・メソードの指導者は、指導年数の差異に関わらず、教育哲学・指導目標・信念・指導法といった多くの指導観を共有していることが示唆された。

ただし、桂(2012)や久保(2013)が指摘した通り、スズキ・メソードの方法論が明確でないという点は、本研究でも見受けられた。その代表例として、読譜学習導入の時期や使用する読譜の教材について、対象者毎に異なることなどが挙げられる。

スズキ・メソードの指導者達が、指導年数の差異に関わらず多くの指導観を共有していることが示唆された一方で、指導年数の差異が影響を与えたと考えられるものも存在した。具体例として、対象者のライフストーリーから影響を受けたと考えられる教育哲学が存在したのはベテラン指導者群のみであった。このことから、スズキ・メソードの指導者は、指導年数を重ねることによる学習過程において、経験に基づく新しい教育哲学を得ることが示唆された。また、指導経験の不足による、自身の指導に対する苦手意識・問題意識は若手指導者群のみに存在した概念であった。これらのことから、スズキ・メソード指導者も、学校の教師などと同様に、経験に基づき成長していくことが示唆された。

M-GTAの性質上、本研究で明らかになったことは、スズキ・メソードの指導者を対象とした仮説的・限定的なものである。今後、より多くのスズキ・メソード指導者を対象とした調査を行うことで、更に客観的で明確なスズキ・メソード指導者の指導観と学習過程が明らかにされるものと考えている。今後も、このような研究を継続的に進めていきたい。

## 論文審査結果の要旨

スズキ・メソッドは日本で創始された音楽教育法で、海外で高い評価を得ていながら、日本国内においては、研究としてのアプローチが困難であることなどから、研究の対象として注目されることは少なかった。このような状況において、本研究は日本の音楽教育の欠落部分を埋めるような意義のあるものである。

スズキ・メソッドの実践や教育法を明らかにすることは、当メソッドに対する正しい認識や理解を広げる上で有用であるとともに、若手の指導者や今後指導者になることを目指す人々に対して多くの示唆を与えるものである。

序章では、スズキ・メソッドに関する国内外の先行研究が行われ、特にアメリカ合衆国における博士論文に関して、その内容をきめ細かく分析している点は高く評価できる。

第1章では、スズキ・メソッドの歴史的経緯と特徴に関する提示とともに、指導者の力量形成についての基礎理論の探求が行われる。調査にあたり、対象者を指導年数の差異によってグループ分けを行った点と、器楽における指導者の力量について考察する際に、音楽科における教師の力量モデルに視野を広げて検討したことは、スズキ・メソッドの特質を把握する上で有意義であった。

第2章では、研究方法についての詳細な説明が施されている。調査に際して半構造化面接法を用い、分析に際して修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを採用したことは、対象者(回答者)の信念や心情を含めた所信をできるだけ客観的な形で集約する方法として、的確なものであると考えられる。対象者に対する十分な配慮がされた調査と正確性を期して行われたトランスクリプト、ならびに精緻な分析はいずれも適切で信頼性が高いものと判断される。

第3章では、若手指導者群とベテラン指導者群それぞれについて、調査結果に基づいた概念の生成とカテゴリー化が行われ、関連図が提示された。

第4章では、総括的考察が行われ、両群の比較により、差異とともに両群に共通する問題点や課題があることが明らかにされる。さらに、本論の目的であるスズキ・メソッド指導者の指導観と学習過程の統合モデルが示された。対象者の問題意識には3つのカテゴリーが存在することが明らかにされたが、その中の〈組織の問題点と課題〉に関しては、両群ともに普及・啓発・マーケティングが挙げられ、〈スズキの指導者間における問題点と課題〉については、両群ともに指導や経営に関する考え方を改善すべきだといった、指導者たちの心がけに関する問題意識を持っていることが明らかにされた。これらのことはスズキ・メソッドの今後のあり方を考える際に重要な示唆を与えるものと思われる。

終章では、結論と提言、ならびに本研究の限界と今後の課題が論じられる。

審査に際しては、調査対象者を抽出した経緯と方法についての記述と、楽器ごとの指導の特性や差異についての検討の必要性が指摘された。今後は当メソッドの発展に向けたさらなる研究に期待するところである。

本論文の内容は多数の指導者を対象とした精緻で適切な研究によって初めて論じられるも

ので、その意味において独自性を有するものである。また、音楽教育メソッドの研究の一つの手法として、今後の研究に多くの示唆を与えるものである。

以上のことから、課程博士 (音楽) の学位論文に十分価するものと判断した。

## 博士學位論文      論文要旨および審査結果の要旨 (第 8 号)

---

平成 27 年 8 月 5 日発行

発 行    武蔵野音楽大学大学院

編 集    武蔵野音楽大学学務部

〒176-8521    東京都練馬区羽沢 1-13-1

電話    03-3992-1128

---